

宮崎の沿岸漁業の移り変わり

穂浜漁協 河野正



宮崎に住んで37年になる。生まれは大分で、その後、大阪で建築業にたずさわっていたが、娘が喘息になったので、空気がきれいな九州へ来ることにした。嫁さんの実家の川内も考えたが、私の母方の実家が高鍋だったこともあり、暖かい宮崎に落ち着くことになった。

子供のころ住んでいた大分では、家が海の近くで、干潟があった。砂や砂利の干潟やドブもあるようなところで、貝ばかりとって遊んでいた。そんな幼少期があるので、海が好きなのだと思う。漁師になるなんて思ってもいなかったが、宮崎へ来たときに、たまたま海が近い山崎地区に住んだことが縁で漁業をやっている。

海の難所の赤江灘

最初はマグロ船に乗って沖縄へ行った。沖縄には、魚はたくさんいるし、海が荒れたときに逃げ込める港もたくさんあった。宮崎には当時はまだ宮崎港がなかったから、沿岸で操業していて海が荒れると、逃げ込める港は油津か細島しかなかった。大淀川右岸にあった赤江港は、海へ出るには大淀川の河口を通らねばならず、波が高くなると危なくて海へは出られんし、漁に出ている間に波が高くなると帰ってこられん。そういう時は、油津まで行って波がおさまるまで何日も待った。

海の難所と言うと、「一に玄海、二に遠江（とおとうみ）、三に日向の赤江灘」と言う。ちょっと波が高くなったときに逃げ込める港が油津から細島までなかったからだ。一ツ瀬の河口には今導流堤があるが、波が高いと出入りできない。一ツ瀬漁協の船には、ふだんから宮崎港に係留しているものもある。宮崎港ができて、河口を通らずに海へ出て行けるようになって、漁業は、それはそれは助かっている。

今でもマグロ船は沖縄や三陸沖へ出かける。漁場が遠いから、水揚げを、近くの港へおろしながら操業を続ける。途中で台風が来たら、ひたすら東へと逃げて台風をやりすごしておいて、また戻ってくる。一度出たら1ヶ月も帰ってこないこともある。長丁場で人

手もいるから、4、5人乗り組んでいく。このごろは、人が集まらないので、船長と機関士だけが日本人で、あとはアジアからの外国人の研修生という船も多い。

漁師になって沿岸漁業

その後、自分の船を持って、宮崎から鹿児島にかけての沿岸で、いろんなものを獲っている。魚は、瀬と呼ばれる岩礁にたくさんいるので、仲間と連絡を取り合いながら、あっちこっち移動する。志布志や鹿児島湾まで行くと、日帰りはできないので、船で寝起きできるようにしてある。魚群探知機、船の軌跡を記録できるGPS（それを地図上に表示もできる）、他の船や陸の位置を確認するためのレーダーなど、最新の機器を積んでいる。電子機器は一つ数十万円する。自分の船を持つには1000万くらいかかるので、そう簡単には漁師にはなれない。



砂浜海岸でとれる魚といえばヒラメ。冬になると岸へ寄ってくるから、船も岸近くで操業する。浜からでも、40cmもあるようなヒラメが釣れる。遠浅の砂浜は、岸から少し離れたところに浅瀬がある。昔は、この浅瀬に立つと、首くらいまでの深さだった。ヒラメは、この浅瀬の内側の、プールのような少し深いところで卵を産む。

グチ（イシモチ）も砂浜海岸の魚。たくさんとれるから、ネコマタギなんて呼ばれた。ほかに、サゴシ（サワラ）、タチウオ、キス、コノシロ、ニベ、フカなどがとれる。昔はキスもよく水揚げされたけど、今は値が下がったから、ほとんどとらない。赤江浜では、昔キス漁をやっていた。砂浜に船が乗り上げる

くらい接近しながら渦巻状に網をひく。

ばちあみ漁のチリメンは、イワシ（カタクチイワシ、マイワシ、ウルメイワシ）の子が多いが、アユやタコやイカの子もいる。小魚が中層に固まって浮いているので、それを2隻の船のあいだに張った網ですくうように集める。網は船の後ろに100mくらい伸びる。網を曳く船は水揚げできないので、2隻の船のほかにもう1隻がついてまわり、網の中の魚をすくいあげながら操業する。



最近では温暖化の影響らしく、昔は沖縄でしかとれなかったような種類が宮崎でとれることもある。宮崎にはもともとイセエビがいるが、このあいだ、沖縄にいるゴシキエビが初めて1匹だけ宮崎でとれた。逆に、このあたりでとれたサゴシ（サワラ）が、三陸沖でとれるようになったという話をきく。

地引網の盛衰

宮崎では、昔は地引網漁がおこなわれていた。宮崎へ来て住んだのが山崎だったが、そのころはまだ立派な浜があり、地引網を手伝った。地引網漁は、地元の農家が総出でする。親方の指示で、砂浜に引き上げてある船を若者が海へ出し、岸から沖へ1kmくらいU字型に網を張る。岸から少し離れた沖に浅瀬があるが、ところどころに切れ目があり、浅瀬を越えて岸に寄せた波が外海へ流れ出て行く強い離岸流（「ダシ」）の通り道になっている。この流れがある部分には魚が集まるので、地引網は切れ目を囲むように張った。

網を張るのは若者の役割で、船が戻ってくる頃合を見計らって、網が張り終わりそうだという連絡が農家の各戸に回る。すると年寄りが浜へ出て行き、機械と人手で網を引く。浜の奥には、網を巻き取る機械（ウィンチ）の小屋が2ヶ所にあり、網を両端から巻き取った。船を出して網を張った者は、そのあいだは休んだり、農作業をしに帰ったりしていた。地引網は農家がやっていたから続いた。

漁業として採算を合わせようとしていたら続いていなかった。

そのころはまだ船は小さくて、沖でもたいした量の魚をとっていたわけではない。魚という資源がまだたくさんあったせいか、地引網で魚がたくさんとれた。その後、浜が悪くなったことや、魚がとれなくなったこともあって、シーガイアができたころには、地引網はおこなわれなくなった。

網の権利は、個人や地域で持っていて、利益があれば配当が出た。それが県の許可制になってから、利益が出たら税金を払わなければならないという話になって、止めることになった。山崎では部落が網の権利を持っていたので最後まで続いた。

砂浜の侵食対策の突堤の長さ

地引網の小屋は、波にさらわれにくいくらい浜の奥につくられる。当時は砂浜が広く、ちょっとやそとの台風が来ても、浜崖の手前にあった小屋までは波が届かなかった。宮崎へ来たときには、すでに一ツ葉有料道路があったが、宮崎港はまだなかった。それでも爺っさまが、浜が狭くなったと嘆いていたのを覚えている。まだ当時はだだっ広かった砂浜を眺めながら、「そんなはずはないだろう」と思ったのを思い出す。

その後ずっと地元に住んでいたが、浜を見に海岸へ出るということは、とんとなかった。海岸沿いの地区に住んでいると言っても、みんなそんなもんだっただろう。それが今度、砂浜の侵食対策だと聞いて、久しぶりに有料道路のレストランのところへ行ってみると、コンクリートに波が打ち付けていたので、びっくり仰天した。

侵食対策として300mも突堤を出すということだが、チリメン漁にとっても、ヒラメ漁にとっても、浜から突き出た突堤を迂回して操業するというのは、とても面倒なこと。100mも網をうしろに曳くチリメン漁は、突堤のあたりではできなくなるかもしれない。300mの突堤は長すぎる。短い突堤なら漁業にはそれほど影響がないのかまわない。赤江浜の短い突堤は、砂浜の保全にあまり役にたっていないようなので、短いものでは効果がないということなのだろうか。いずれにしても、300mの突堤は、宮崎の漁業の将来にとって良くない。